

# 日本から世界へ広がる 「学びの共同体」

## —小中高の学校改革から社会全体へ

2020年度から小中高校で順次実施される新学習指導要領。そのキーワードは「主体的・対話的で深い学び」だ。しかし20年以上前に、すでに対話的で探究的な学びに着目した「学びの共同体」を立ち上げ、日本のみならず世界各国で着実に成果をあげてきた人物がいる。学校改革の第一人者である佐藤学氏に、単なる方法論ではない、ヴィジョンと哲学にもとづいた実践的な取り組みについて伺った。

協坂敦史 取材執筆  
増田智泰 撮影



「学習院大学文学部特任教授」  
佐藤学 Sato Manabu

インタビュー

ゆっくりと静かに、だが着実に広がっている。

政治的なトップダウンではなく、かといってボトムアップの改革を求める運動でもなく、自律的にネットワークを形成しながら、今では全国で小学校から高校まで、公立の小中学校では約1割の4000校近くが改革に取り組んでいる（このうちパイロット・スクールは約300校）。

「よく、導入を検討している教師から、佐藤さんが中心的指導者ですかと訊かれますが、いつも中心はあなただ、あなたが中心となって始めなければ、改革は絶対に成功しない、と答えています。これは、運動ではない。これまで、数え切れないほどの運動が上から、また下から始まり、教育を改革しようとしてきましたが、すべて失敗してきました。教師一人ひとりが、それぞれの学校が中心となって連携し合うのが、私たちのやり方です」

### 聴き合う関係がすべての出発点

「学びの共同体」の改革は何から始まるのか。ひとりの教師が研修や公開授業を見学するところから始まることもあれば、校長がリーダーシップを発揮したり、地方自治体として教育委員会がまとめて指導したりすることもある。しかし共通するのは、どの場合でも同じ。学校のなかで一人ひとりが他者の言葉に耳を澄ませ、聴き合う関係を築くことが、すべての出発点となる。

「対話が大切だと言われますが、実は学校ほど対話のない場所も珍しい。校長の訓話は誰も聴いていないし、職員会議で先生が発言しても、教室で子どもが発言しても、誰も聴いていない（笑）。教師というのは雄弁に話す職業だと思ってる人が多いのですが、よい教師というのははみな

よい先生とよい生徒のいる、よい教室のイメージとは、どんなものだろう。優しく微笑み、面白くてためになる話が上手な先生、それを真剣な眼差しで聞く物静かな生徒といったところだろうか。あるいは、ひとたび先生が生徒たちに発言を求めれば、活発な議論や笑い声が沸き立つような、明るい教室だろうか。

「学びの共同体」の改革が行われた学校の授業を見たら、そのようなステレオタイプを見直さずにはいられないはずだ。その授業は、どちらかという静かで地味。先を争って発言しようとする生徒もいないし、先生も受け身の姿勢が目立つ。でもじっくり見れば、生徒たちの誰もが授業に参加し、あらゆる場所で静かな対話が交わされている。なかでも驚くのは、「ジャンプの学習」と呼ばれる発展的な難しい課題に取り組む子どもたちの真剣で嬉しそうな眼差しだ。

「こういう授業を見ていてよく分かるのは、子どもにとって教室で友達と学び合うことは幸福だということ。今の子どもは学ぼうとするモチベーションがないとか、よく言うじゃないですか。でも、それは違う。学ぶ喜びを知れば、人間は誰もがもっと学びたいと思うものなのです」

そう語ってくれたのは、「学びの共同体」の理論的支柱をつくり全国的に広めた、いわば「生みの親」である佐藤学氏だ。実践し、行動する教育者としてさまざまな試行錯誤を繰り返した知見をもとに、神奈川県茅ヶ崎市で最初のパイロット・スクールとして浜之郷小学校が創設されたのは1998年だった。2001年には静岡県富士市の岳陽中学校。その後も東京大学教育学部附属中等教育学校など、さまざまな学校がパイロット・スクールとなる。以来、「学びの共同体」の改革は、

聴き上手で物静かです。五感のなかで最も受動的な耳を使い、聴き合うという行為をベースに、学校における人間関係を再構築することから始めるのです」

教室のなかでも、生徒と生徒が互いに耳を傾け、聴き合う関係を構築する。顔がよく見えるコの字型の座席配置と3〜4人の男女混合グループというスタイルも、この聴き合う関係を促進する。もちろんそれは単なる礼儀や態度の問題ではない。教室のなかで言いにくいこと、とりわけ「分からない」という声に耳を傾ける。分からない子がいたら分かる子が支える、というこの「学び合い」こそが「学びの共同体」の大きな特徴だ。

「分からない子を、分かる子が支えるというのは、すごい力を発揮することになる。どんなに大人が支えようとしても、道はこちらだと教えようとしても指導できない子どもが、ほかの子どもの支えによって、立ち直ったり戻ってきたりすることは珍しくありません。でも、多くの子どもは他者への無関心と不信で凝り固まっている。馬鹿にされたり、傷ついたりした経験しかない子どもたちが、誰かに支えてもらえると実感したとき、子どもたちの表情が変わるのが分かります」

子どもたちを救う力をもっているのは子どもたち自身であると実感し、この力を中心に据えて信頼することから始まった改革。だが、もちろん大いに時間はかかる。

たとえばそれは、ひとりの教師がふと口をつぐみ、何かを言いたいのに言うことのできないひとりの生徒に気づくところから始まり、やがてクラス全体、学校全体に波及していくものなのかもしれない。声の大きな、雄弁な者の方が偉いという現代の社会常識からすれば、それは小さな革命を



地域にパイロット・スクールを設置し、そこを拠点として近隣の学校改革のネットワークを形成する。「学びの共同体」展開当初にパイロット・スクールとして創設された神奈川県茅ヶ崎市の浜之郷小学校（右）と静岡県富士市の岳陽中学校（左）での授業風景。写真提供／佐藤学（以下すべて）



起こし続けることだといえるだろう。

「多くの改革が失敗するのは、曖昧に考えて急激に変えようとするからです。現実を徹底的に分析することなしに、課題を設定して急ぐ。そうではなく、今までにない見方で現実を見て、そのかわり緩やかに変えていこう (Think revolutionarily, change evolutionarily.)」と言っているんです。2、3年で達成した改革はすぐに消えていきますが、10年で変えた改革は10年後も消えないものです」

### 難しい課題こそが、子どもたちを夢中にさせる

互いが助け合うという、いわばケアと共通する倫理をベースにした、学び合う環境づくり。だが、それだけでは足りない」と佐藤氏は指摘する。

「弱い人のために心をくだし、支え合う。学びの共同体はケアの共同体でもあります。けれども、優しいケアばかりになってしまう。ケアは支えですが、学びは闘いでもある。もし本当に学ぼうと思ったら、たとえどんなシビアな家庭環境にあっても、そこで読書をしたり学校の課題に取り組んだりしなければならぬ。それは自分との闘いであり、強さが必要。学ぶためにケアは必要ですが、学びそのものは闘い。ここには、矛盾もあるのです」

そこで、いっそう大事な意味をもってくるのが、「ジャンプの課題」と呼ばれる、飛躍のある難しい課題設定を授業のなかに採り入れる仕組みだ。4人ほどのグループをつくった子どもたちは、授業の前半で教科書に書かれているような基礎を学んだ後、授業後半には、それよりも遥かに高難度の問題に取り組む。

たとえば、三重県御浜町の小学3年生の「かけ



誰もが理解すべき「共有の課題」(教科書レベル)と、その理解を基礎として挑戦する「ジャンプの課題」(教科書レベル以上)のふたつの課題で授業をデザインする。三重県御浜町の小学3年生の「かけ算の筆算」では、教師がヒントを出そうとすると「もう少し待って!」と必死で解こうとする姿が見られ、長野県木島平村の中学1年生の「光の反射」では反射板を顕微鏡で観察したり、鏡のモデルをつくるなどさまざまな工夫が見られた。

算の筆算」で行われたという「共有の課題」は、「1個89円のボールを12個買います。代金はいくらですか」というもの。これでつまづく子どもにはいる。一般の小学校であれば、その子たちのために、さらに易しく説明し、徹底して同じような課題を繰り返し教えることになるだろう。

ところが、この授業では続けて「針金を使って一辺24cmの正方形を48個つくと、92cmあまりました。針金は何mありましたか」という「ジャンプの課題」が示される。子どもたちは歓声をあげて喜ぶが、グループで取り組んでも簡単には解けない。それぞれに、あちこちでつまづきながら皆が夢中になったまま授業の終わりを迎える。もちろん、正解にたどり着くのは、ごく一部の生徒だけ。それでよいのだろうか。一体、ここで何が起きているのだろうか。

あるいは長野県木島平村の中学1年生の「光の反射」では、「入射角と反射角が等しい」という実験の後で、自転車や道路標識などで使われる反射板(どの方向から光を当てても元の方向へ反射する)を渡し、その仕組みを顕微鏡で観察させていた。反射板の仕組みをちゃんと知っている大人がどれだけのいるだろうか。ひじょうに高度な課題である。「そもそも、学力が十分にある多くの子どもにとって、学校の授業は退屈なものでした。でも驚いたのは、ジャンプの学習が好きなのはむしろ、できる子どもたちよりも、できない子どもたちの方だったのです。もちろん、先ほど説明した『聴き合う関係』がしっかりとできてきているという条件のもとでの話ですが、それがなければ、優秀な一部の生徒だけが解いて自慢するだけになってしまふ。でも、協同で探究するという前提さえあれば、それも変わってきます」(図1)

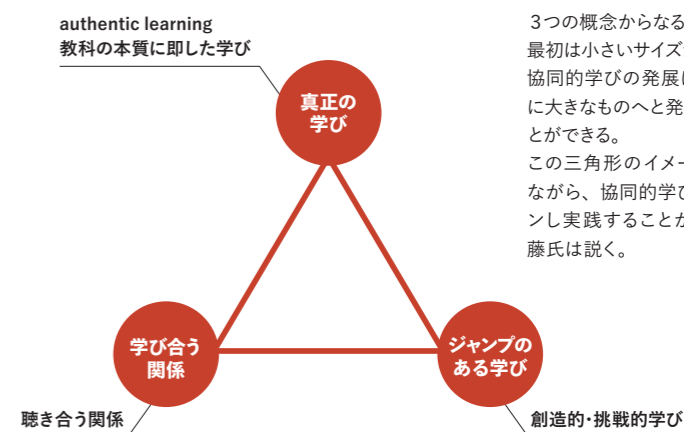
あり方を発見する。もちろん、テストの点数を上げるという結果を求めているのではない。だが、「学びの共同体」の改革を行った学校の多くで、結果的に低学力層の子どもが劇的に減り、全体の学力も大きく伸びている、と佐藤氏は胸を張った。

### 世界へ広がる「静かな革命」

視野をもっと広げてみると、実は世界中の教室でよく似たことが起きている。コの字型に並んだ

3つの概念からなる三角形は、最初は小さいサイズから出発し、協同的学びの発展により次第に大きなものへと発展させることができる。この三角形のイメージをもちながら、協同的学びをデザインし実践することが大切と佐藤氏は説く。

■図1: 学びが成立する要件のイメージ



なぜ、できない子どもたちが喜ぶのだろう。自分でも最初はよく分からなかったと笑う佐藤氏が、そこには3つの理由があると説明してくれた。ひとつめの理由は、いわゆる「勉強のできない子」がもっている学びのスタイルに関わる。彼らの多くは、基礎から順番に応用へと階段をのぼっていくオーソドックスな学びを苦手とするが、逆に応用を通して基礎がもっている意味を理解できることが少なくない。

もうひとつは、いつでもできる子に教わってばかりの子どもが、「ジャンプの課題」では同じ分からないという平等な立場で、ほかの子たちと対等

子どもたち、数人のグループによる共同作業を中心とした学習風景。佐藤氏によれば、20世紀末にヨーロッパ、アメリカ、アジアの違いを問わず、ほぼ同時にその変化は起きたのだという。「生徒全員が教師の方を向いて話を聴くというスタイルは、日本のほかにアジアの農村などではまだ少しだけ残っているかもしれませんが、今はすっかり消えてしまいました。この静かですが劇的な変化は、社会構造の変化に対応したものだと思えます。世界中で単純労働が減った。大人になっても学び続ける必要があります。大人の仕事を前提とする知的な仕事が増えた。労働のスタイルが変わったから、それを支える学びのスタイルも変わった。必然的な変化です」

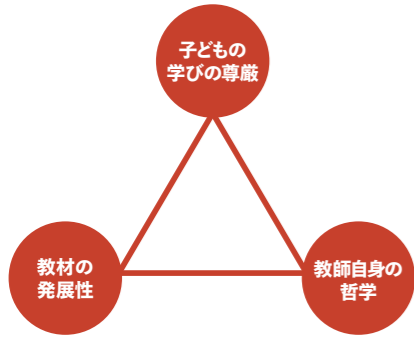
大切なのは、その先だという。確かに、グループ学習の体裁をとってはいても、本当の意味でコラボレティブな関係を教室のなかにつくるのは難しい。世界中の多くの学校で行われているアクティブラーニングも、実はほとんどがこれまでと同じ「教師から生徒へ」という、知識伝達型のカリキュラムにとどまっている。知識を吸収するのではなく、「知識を活用する探究」を学ぶための新しい仕組みが、世界中で求められている。

「ポイント」は、対話的で探究的な学びのスタイルを身につけることができるかどうか。だからこそ、むしろ活発に話し合っているグループ学習が一番よくない。静かに対話できている学びが一番よい、というのがだんだん分かってきたのです」

この10年のあいだに、「学びの共同体」の改革は国際的にも爆発的に普及した。とりわけ、韓国、中国、台湾などでは多くのパイロット・スクールが創設され、教師だけでなく教育行政に携わる人びとの関心もひじょうに高い。こうした海外での



■図2：教師の学びの課題



授業協議会では、よしあしを「評価」し「助言」するのではなく、上記3つの課題を中心とした「学びの質の向上」を目指す。子どもの「学びの事実の省察(リフレクション)」を、生徒たちと同様、対話的に協議していく。



学校改革の目的は、ひとり残らず教師が専門家として成長できる学校を築くことでもある。そのためには、授業の公開と授業協議会の実施が重要であり、年間30回、多いところでは100回以上の授業研究が行われている。



海外では、2006年に政府科学研究部に「学びの共同体研究所」を創設した中国をはじめ、佐藤氏が教育省政策顧問として招聘されたメキシコや、教育学会の講演を契機としたペンシルバニア州立大学での改革が行われているアメリカなど、その活動は広がっている。毎年韓国で開催される「学びの共同体夏のセミナー」(上)には、例年各国から1300人ほどが参加している。



くためには、やはり対話的で探究的な「学びの喜び」を採り入れたものである必要があるだろう。深い学びがあれば、ひとつの企業や業界が社会のなかで何を行い、何を变えることができるのかという、より大きな責任感やリーダーシップにもつながっていくはずだと佐藤氏は示唆する。「NPOで仕事をしている人たちが、ボランティア活動をしながら学んでいる人たちは、そういう学びを取り戻していると思う。でも、本当に学びを取り戻してほしいのは、やはり企業研修ですね」ポイントになるのは、やはりシステムを变えることだという。その点でも「学びの共同体」の学校改革が参考になるはずだ。

教室という壁に囲まれてひとりですべてを行わなければならない教師という仕事は孤独なものだと、佐藤氏は語る。中学校や高校であれば、さらに教科という大きな壁が伝統的であり、ほかの教科のことには口を出さないという不文律が存在した。このような壁を取り払い、教師たち自身が学び合うためには、どうしたらよいか。

たとえば、多くの学校で行われている公開授業だが、ひじょうに無駄が多く、しかも若い教師により厳しい試練を与える通過儀礼的な意味合いをもたせるなど、多くの悪い伝統が残っていると指摘する。こうした研修を変えて不必要な壁を壊し、教師たちが互いに学び合う「同僚性」が築かれるためには、どうしたらよいか。

「まずは原則としてどの教師も必ず年に一度、公開授業を行う。つまり、誰もが自ら研究テーマをもった当事者となり、お客さん(傍観者)はひとりもない。そして、どう教えるかというテクニクではなく、子どもたちの学びに注目する。いつ、どんなときに子どもの学びが起きたか、学

関心の高まりについて佐藤氏は、「国民国家と資本主義経済に従属する古い教育システムからの転換」という大きな流れとともに、もうひとつ重要な変化が背景にあると指摘する。

「公教育の危機というのは、日本ではまだそれほど深刻なものとして感じられないかもしれませんが、しかし、海外では新自由主義にもとづいた教育の市場化という流れがひじょうに強くあり、多くの教育者が懸念をいんでいます。教育はもはやIT産業と並ぶようなビッグビジネスであり、莫大な投資が流れ込んでいく分野なのです。一方で、公教育を支える財政は多くの国で逼迫している。そういう文脈のなか、新しい学びの形、新しい学校の姿、新しい教師の役割をどうつくっていくのか。幸か不幸か、今のところ海外の方が危機意識は強いと感じています」

大人の社会にも、より深い学びを

小学校から高校まで、学びの場にはもちろん多くの問題がある。だが、それを支える大人の社会はどうだろうか。21世紀型に転換したという社会を構成する企業をはじめとする職場における「学び」は今、どうなっているのだろうか。

「この30年くらいで顕著な傾向だと思うのですが、社会全体が学校化している(学校化社会=スクールドソサエティ)。かつて学校的なものとして批判されてきたもの、たとえば理不尽なほど厳しい規律だとか、一方的な知識の伝達とかいうものが、今はむしろ企業のような組織で目立つようになってきた。先生から一方的に話を聞くだけの授業は日本の学校でもすでに珍しい光景となりつつありますが、企業の研修ならまだ当たり前です」

こうした指摘は、多くの社会人にとって耳の痛いものかもしれない。効率を重んじるあまり、私たちは学びと労働のあいだに線引きがなくなっても、ほとんど疑問すら感じなくなっていないだろうか。「まず変わらなければいけないのは、大学だと思っています。今の大学は、まるで働くための知識と技術を身につける専門学校になってしまっている。生涯、学び続けるための基礎をつくっていない。それは、ひと言でいうと教養です。ものごとに対する知的な関心をもち、他者と話し合いながら、実りある社会を展望することのできる市民的資質とでも言うべきもの。日本の教養水準の劣化というのはひどくて、まず大人が本を読まなくなっているでしょう」

企業が研修などで職能を高めることは、もちろん重要である。それが深い学びへとつながっている

びが止まったか。方法論ではなく、教室で起きた事実だけに注目すると面白いし、互いに学ぶことができる(図2)。よい教え方を主張し合っても、声の大きな人が勝つだけなのです」

聴き合う関係を大切にすることの重要性が、ここでも強調される。学びは闘いでもあるというが、それはおそらく自分との闘いなのだろう。だから、真の学びは他者と協同することで、勝ち取ることができるのだ。

「東洋でも西洋でも、多くの思想家が学びというものを旅に喩えています。確かに学びは、既知の世界から未知の世界への旅です。旅というのは、出会いと対話です。新しい世界と出会い、新しい自分と出会う。一巡して帰ってきたときには、もうひとつ新しい世界を見つけ、もうひとつの新しい自分を見つけ、もうひとつの新しい人とのつながりを見つめる。私はそれを、世界づくり、仲間づくり、自分づくりと呼んでいます」

世界中の教育現場に「静かな革命」を起こしつつある、「行動する教育学者」の言葉のなかに、他者や世界へと開け放たれた扉としての学びの力を感じた。子どもたちがもつ学びへの渴望、そして支え合う力に学び、私たち大人も社会のあり方を考え直してみるべきではないだろうか。



佐藤 学  
さとう まなぶ  
学習院大学文学部特任教授、東京大学名誉教授、1951年、広島県生まれ。東京大学大学院研究科修了。三重大学教育学部助教授、東京大学教育学部助教授、東京大学大学院教育学部研究科教授を経て現職。アメリカ教育学会名誉会員、全米教育アカデミー会員。日本教育学会元会長、日本学術会議第一部部長などの経験を経て「学びの共同体」の学校改革の研究に取り組む。著書は『学校を改革する―学びの共同体の構想と実践』(岩波書店)、『学びの共同体の挑戦―改革の現在』(小学館)など多数。

【取材日：4月6日】